Ⅳ．英語教育研究

目　　次

1　はじめに

2　校区内英語スタンダードへの道

3　ZOOM を利用した国際交流活動

4　クラスみんなにわかりやすい小学校英語
　～できた！楽しい！と思える授業をめざして～

5　やり取りを通して、子どもたちをつなげたい！

6　伝えたい気持ちを育む外国語教育

1 はじめに

1 英語教育研究会について

新学習指導要領に小学校の外国語活動・外国語科が教科として明示され、小・中学校における外国語教育の授業づくりや連携のあり方が大きく変わることになった。そこで、英語教育研究会では、新学習指導要領に対応する授業実践について、関西大学外国語学部竹内理教授の指導助言のもとに研究に取り組んだ。

2 研究テーマ

全体テーマ：「新学習指導要領に対応する授業実践の研究～授業づくりから評価まで～」
各研究員の研究テーマは下記のとおりである。

兵頭　裕子	校区内スタンダード作成への道
北川　章子	ZOOM を利用した国際交流活動
中野　温美	クラスみんなにわかりやすい小学校英語 ～できた！楽しい！と思える授業をめざして～
稗田　将太	やり取りを通して、子どもたちをつなげたい！
酒井　万由子	伝えたい気持ちを育む外国語教育

3 活動概要

英語教育研究員連絡会

月に１回程度集まり、竹内教授の助言のもと研究を進めていった。

第１回：今年度の目標設定
第２回：研究のテーマの決定・共有と講師による指導助言
第３回：研究員による代表者授業と講師による指導助言
第４回：教育センター報告会リハーサル
第５回：教育センター報告会に向けてリハーサルと打合せ

教育センターフォーラム

令和３年２月１日（月）～５日（金）、８日（月）～12 日（金）に開催された茨木市教育センター報告会において、２名の研究員が発表を行った。

2 校区内英語スタンダード作成への道

兵頭　裕子

1 はじめに

昨年度に引き続き、小中連携教科指導担当者として所属中学校と校区内３小学校の外国語（英語）に携わることとなった。本年度の目標は９年間の指導の一貫性・系統性を生かした学習指導の工夫である。本年度は４月当初から小学校教員が指導目標及び指導計画を立て、指導案を作成し、Ｔ１として授業を行った。そして適宜指導・助言を行い、校区内の英語教育が一貫性･系統性を生かしたものとなるように学習指導の工夫及び改善を行ってきた。校区内の子どもたちが中学校入学後、スムーズに授業が受けられるように英語教育のスタンダード作成（主に小学校英語を中心に）を目指して中学校英語科教員と小学校担任が試行錯誤しながら取り組んできたことを報告する。

2 取り組んだこと

（１）統一したこと（教材編）

まず、基本的な教材を統一した。本時のめあてを明確にするために「今日のめあて」や授業の流れカードを英語で作成し、全クラスで使用した。月名、曜日、天気、気持ちの絵カードも作成し、授業始めに確認して Classroom English の定着を図った。毎回の授業始めに行うことやある程度の流れも決めた。流れが決まっていることは教員、子ども両者にとってメリットが大きかった。さらに昨年度から引き続き、ほめ言葉一覧とリアクション一覧のカードを全クラスに用意し、授業中に掲示することで使用を促し、定着を図った。また、教員向けに Classroom English for teachers カードを作成し、授業で適宜使用した。カードの指示や挨拶は、担任が英語で表現するようにした。それ以外の指示や挨拶は、日本語でもよいこととした。

（２）統一したこと（授業編）

① Song

Jingle と当該単元の Let’s say it together!か Song をそれぞれ１回ずつ歌い、毎時間繰り返し歌うことで、語句や表現に慣れ親しむことができるようにした。（毎時間するので初回以外は１回だけ歌うことにした。）繰り返すことで、子どもたちも語句や表現に慣れ、Small Talk や発表テストで自信を持ってスラスラと言うことができるようになった。

② Word

Word コーナーでは当該単元で習う単語を使った活動を行い、新出語句や表現の定着を図った。この活動は NET が行うのも効果的である。機械的な繰り返しではなく、語句や表現を楽しみながら自然と何回も口にしてしまうようなゲーム要素の入った活動、例えばキーワードゲームやかるた等を短時間で行うことが望ましい。短時間でというのは、これが本時のメインの活動ではなく、あくまで単語や表現の定着を図るために繰り返し行う帯活動だからである。「聞く」活動を行い、聞いてわかるようになってきたら「話す」活動を行うというように、子どもたちの学習状況に合わせてミニゲームを選ぶ必要がある。

③　Small Talk

Small Talk は一単元で２～３回行った。担任によっては毎回 Small Talk を行い、子どもたちの会話力の定着を図っていた。例文を提示して始めるのではなく、「好きな動物について会話をしてください。では、始め」のような指示で行った。ペアを替えて同じ話題を繰り返すことで既習表現の定着と会話の練習を行った。

（３）統一したこと（評価編）

評価で統一したことは、「各学期に１回以上パフォーマンステストを行うこと」と「１年間で発表とやり取りのどちらの発表形式も経験させること」である。パフォーマンステストの観点と領域は基本的に「話すこと（発表）」「話すこと（やり取り）」の思考力、判断力、表現力で評価した。なぜなら「話すこと」をペーパーテストで判断することは難しいからである。また、思考力・判断力・表現力は、知識及び技能を活用して課題を解決する力を身に付けているかを評価する観点なので、実際にコミュニケーションを行う実技テストで評価するのが適している。パフォーマンステストは教室で、前に出てきて１人ずつ行った。子どもの実態に合わせて別室で行ってもよいが、友達の発表を見て学ぶことも多いので、段階的にみんなの前でも１人で発表できるようにした方がよい。「話すこと（やり取り）」で評価する際は子ども同士のペアでもよいが、公平を期すために教員と子どもで行う方がよいだろう。「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の評価は主にペーパーテストやワークシートで行った。ペーパーで評価できる観点や領域は教科書付属のワークシートを利用した。問題の内容から３観点の何に対応しているかを判断した。また各校の実態に合わせたふり返りシートを作成し、子ども自身のふり返りを単元ごとなどに適宜行った。ふり返りシートと教員が授業中に行う子どもたちの観察などを参考にして、主体的に学習に取り組む態度を評価した。「書くこと」は教科書の Let’s Read and Write!やパフォーマンステスト用原稿やワークシートで評価した。「書き写す→教員が点検する」を複数回繰り返し、最後のものを評価した。点検では大文字・小文字の違いや語と語の間の間隔、記号や四線の使い方などを指導する。一方的に知識を教え込むのではなく、良い例と悪い例を見比べて考えるなど、子ども自身の気付きを促すようにするとよい。「読むこと」の評価は教科書付属のワークシートの対応問題で評価した。「書くこと」「読むこと」は高学年からの学習なので「聞くこと」「話すこと」と同じレベルではない点に注意が必要である。

３　成果と課題

成果としては、５、６年担当教員に行ったアンケートで結果が表れた。英語の授業に対する不安や心配が解消できたと答えた教員が９割以上だった。その理由として、「英語の授業の流れがわかった」が最も多く、まさに本年度の取組みの成果である。

課題としては、毎年同じ教員が高学年を担当する訳ではないため、英語指導の経験が少なく単元目標を意識した逆向き設計の指導が難しかった点である。しかし経験を重ねるうちに解消され、より良い授業をされていくだろう。小学校の教員だからこその授業の工夫・改善も度々見ることができ、私にとっても学びの多い１年であった。

3 ZOOMを利用した国際交流活動

北川　章子

1 オーストラリアとの交流のきっかけ

本来なら 2020 年はオリンピック・イヤーにあたり、茨木市がオーストラリア・ホッケーチームのホストタウンを務めている。2019 年度に本校・美術部が茨木市のホストタウン事業の一つである「チョーク・アート」に参加したことをきっかけに、市のスポーツ推進課より、オーストラリアにある学校との交流活動についての提案をしていただいた。2019 年の段階で、はたして交流相手が見つかるのかさえも定かではなかったが、生徒たちに英語でのコミュニケーションの楽しさを伝えることにつながるのではないかと考え、できることを模索することにした。

2 国際交流希望校の登録(2019 年)

一般財団法人・自治体国際化協会、クレアシドニー事務所(Japan Local Government Centre, CLAIR, Sydney)の所定フォームに本校の情報と交流の希望条件を記入の上、希望校登録をすることを勧められ、交流希望相手校の連絡を待つことにした。学校の基本情報には学校の連絡先を掲載するので、連絡の中には国際交流旅行斡旋業者もあったが、メール等で連絡を取りながら本校の希望条件に合う相手校を粘り強く見極めることにした。すると、オーストラリア New South Wales 州にある私立校 Molong Central School から連絡があり、交流希望生徒の学齢が一致していることが分かった。

3 交流の留意点と課題

交流に際しては、いくつかの課題があり、相手校と本校双方の方向性を一致させる必要があった。希望すべてを相手校と合致させることはできなくても、いくつかの課題を留意しながら企画を進めた。

（１）学校規模と生徒人数

相手校は１学年が約 30 人ほどの小規模校であり、しかも日本とは学期制もカリキュラムも異なる。本校の 48 期中学一年生は 149 人である。そこで、本校の 1 年生に国際交流の希望者をアンケートで募ると、17 人ほどの応募があった。ところが相手校では、各学期で履修クラス生徒の入れ替わりがあるとのことだった。当初はゆっくりと時間をかけて手紙等をやりとりする交流を想定していたが、タイミングを逃すと相手校の生徒たちが入れ替わってしまい、相手校の指導をする先生にも不都合が生じることが分かった。

（２）交流手段

上記（１）のような理由から、Skype 等を利用したリアルタイムでの交流が望ましいことが分かった。実際に 2019 年には学校 PC に Skype のインストールを依頼して交流をしようとしたが、教室機 PC ではアカウント取得に障害があり、実現できなかった。しかし、2020 年のコロナ禍を受けて、学校教室機ＰＣに ZOOM がインストー

ルされることになり、事態が一変した。リアルタイムでの交流が、相互の都合さえつけば簡単に実現できることになった。

（３）時差とクリスマス休暇

南半球のオーストラリアは、北半球の日本とは季節が逆になっている。さらにMolong Central SchoolのあるNew South Wales州ではサマータイムを採用しており、夏季には日本の標準時とは２時間の時差がある。本校の交流希望生徒が４つのクラスに散在しているので、授業中に交流時間を割くことができない。12月２学期三者懇談期間の、授業がない午後に設定することも考えたが、12月16日以降は相手校がクリスマス休暇に入ってしまうとのことだった。本校も冬休みに入る前の２学期の中で、放課後か休憩時間にしか、交流時間を持つことができない。そこで、本校の交流希望生徒全員が参加できる時間帯として、昼休憩時間を利用することにした。45分しかない昼休憩時間に、生徒たちが昼食を食べる時間を確保しながらできる企画を立てることにした。

４ 国際交流 ZOOM 会議

（１）準備

中学１年生は、２学期に英語での自己紹介発表を行っている。絵入りの英文原稿を書かせ、その原稿を書画カメラで電子黒板に写し、原稿を見ずに発表する。生徒たちはいつでも英語で自己紹介をでき、絵入り原稿の書面もある。事前に電子メール添付で生徒の英文原稿をスキャンし書面データを相手校に送信して、内容を読んでおいてもらうことを依頼した。

（２） Who-am-I Quiz「私の名前を当てて下さいクイズ」

相手校に、「こちらからはWho-am-I Quizを行うので、ZOOM画面で日本人生徒中の誰が自己紹介しているのか、名前を当ててほしい。事前に誰の自己紹介原稿なのかを読んでおいてほしい。ヘボン式ローマ字で書かれた日本人の名前は、オーストラリアの生徒たちにとっては発音しにくいと思うが、確認しておいてほしい。」と依頼しておいた。ZOOM の通信状況も分からない中、どれくらい相手が反応してくれるのかどうか不安もあったが、企画の意図や希望をできるだけ詳しく知らせておいた。当日の昼休み、お互いに初対面、生徒のZOOM会議参加も初めて、少し唐突に始まった日本/オーストラリア双方わずか10分間ずつ合計20分間の交流だった。相手も本校生徒も一生懸命に伝え応えてくれた。忙しくて本当に嵐のような交流タイムだったが、生徒にも自分の英語が相手に伝わることが分かったのではないかと思う。

５ 今回の国際交流をふりかえって

交流参加生徒にふり返りミーティングを招集し交流の感想を聞いたところ、今後もこのような国際交流を進めたいという意見が多くあった。前述のように、相手校の生徒は入れ替わるが、今後も交流の機会を持ち、生徒たちのコミュニケーションの可能性を探っていきたい。

4 クラスみんなにわかりやすい小学校英語

～できた！楽しい！と思える授業をめざして～

中野　温美

1 はじめに

英語専科として、３年生から６年生の子どもたちと共に外国語の学習を進めてきた。楽しく前向きに参加できる児童も多いが、「むずかしい」「わからへん」と苦手意識を持つ児童も各クラスにいる。クラスみんなにとってわかりやすく、楽しく参加できる授業をめざして、試行錯誤して日々取り組んでいる実践を報告する。

2 取り組んだこと

（１）興味を育てる

児童が外国の異文化について知り、広い世界に興味をもつきっかけを作ることが、小学校外国語の授業で最も重要であると考える。「日本と違う事を知るって面白い！」「外国に行ってみたい！」「色んな国の人とお話できたら楽しそう！」と児童が外国語を学ぶ意欲を感じられる様に、外国での体験談を話したり、ＮＥＴに自国の文化について伝えてもらったりする時間を大切にしている。

（２）バランス良く様々な活動を行う

活発に話す・聞く活動が好きな児童や、歌やチャンツが好きな児童、落ち着いて書く作業が好きな児童など、一人ひとり好みや興味は異なる。１時間の授業の中でバランス良く様々な活動を取り入れ、授業の流れを視覚化・パターン化することで児童が安心して参加できるよう心がけている。

（３）スモールステップで進める

最終目標に向けてバックワードプランニングで単元計画をしっかりと立て、少しずつ力をつけていける様に進めている。昨年度は「英語を沢山聞いて慣れるように」と、クラスルームイングリッシュを多く使っていたが、「先生の話がよくわからない」と不安に感じる児童もいた。年度初めから沢山使うのではなく、ジェスチャーを付けて分かりやすい表現から始め、３年生から６年生まで４年間で少しずつ様々な表現を聞き、慣れるように系統立てて話すようにしている。ゲームを行う際は、キーワードゲームやかるたなど速さを競うゲームは、十分単語に慣れ親しんでから単元後半で行うようにしている。発表の際は、安心して皆に伝えられる様に、必要であれば英文に自分でカナを書いたもので読む練習をし、読み方に不安を感じていないか一人ずつ確認するよう努めている。

（４）必然性を感じられる工夫

児童が「知りたい！聞きたい！」と感じ、意欲を持って取り組める場面設定を意識して授業を構成した。メインの活動だけでなく、以下の様な問いかけ等で必然

性は毎時間作り出すことができると考える。

①クラスの友だちについてより良く知れるような Interview game

②足りない情報を聞き合う Information gap の活動

③答えを予測してから行う○×ゲームや活動

④教科書のリスニング問題では、事前に内容について少し話して興味を持たせ「この子（国）の場合どうだろう？」と問いかけてから聞かせる。

⑤聞き取った内容を次の活動に使う事を伝え、見通しを持たせてから、発表や Interview で友だちから内容を聞き取らせる。

（５）児童が互いに良さを認め合う場面を作る

発表の際には、初めに、意識して頑張りたいポイントを全員で確認し、友だちが頑張っている所をよく見て、nice カードを書き合う時間を作った。見つけた友だちの良さを最後に班の中で共有したり、nice カードを切って相手に届けたり、発表以外の時間は、「今日１時間の中で、だれか１人の事をよく観察して頑張っている所を振り返りに書けるようにしよう！」と伝えて、お互いの良さを認め合う場面作りを行った。このように、児童たちは他者からのフィードバックを得ることで、自分の良さを知り、自信に繋がっていった。

（６）多感覚学習を意識する

聴覚・視覚・触覚・運動感覚をバランス良く使い、効果的に学習を進められるよう意識した。例えば単語を教える際、動詞(run など)や形容詞(fast など)、道案内は体で表現する。形容詞(soft など)は実際に触らせる。位置(on など)は物をその場所に動かす。絵カードを操作しながら声に出してゲームをする。アルファベットや形は、体で大きく表現したり、紐や粘土で形を作ったりする等、よりわかりやすく印象づけやすくする工夫をした。

（７）達成感が得られる工夫

児童が毎時間少しでも達成感を得られるよう、細かくフィードバックをする事が重要であると考える。活動中や発表中には、必ず途中で一回止めて、良い所を伝えると共に、より良くするためにできる事を一緒に考える、中間評価を行った。毎時間の振り返りでは、ゲームの感想等ではなく、どんな事を意識して頑張ったのかを書くよう声かけを続け、多くの児童は自分の学びを振り返って考えられるようになってきた。ルーブリックを明確に伝えた上で、１対１のやり取りを行ったことで児童たちは意欲的に取り組むことができた。

４ おわりに

小学校の外国語につまずいている児童にとって、わかりやすく参加したくなる授業の工夫は、クラス全体にとっても楽しい授業に繋がると考える。児童のつまずきに気づき、その原因を探り、指導内容や方法を柔軟に変えることが大切である。児童の様子をよく見ながら、わかりやすく楽しい授業を今後も探求していきたい。

5　やり取りを通して、子どもたちをつなげたい！

稗田　将太

１　はじめに

今年度、小学校外国語専科を担当し、３・４年生の外国語活動と５・６年生の外国語科の学習を児童と共に進めてきた。英語シャワーデイを実施したときのアンケート結果によると、外国語（英語）に対して、とてもすきと回答した児童は多く見られた。しかし、反対に、どちらかといえばきらいや、きらいと回答した児童がいることにも気づいた。そこで、どちらかといえばきらいや、きらいと回答した児童にも、「英語って楽しいかも！」と少しでも思ってもらえることを願い、できることは何かを考えた。中学校英語科や小学校外国語専科の教職員に相談しながら、やり取りが楽しいと感じられる活動をつくることをめざした外国語科の授業実践と、そこから見えた今後の課題、成果について報告する。

２　実践したことと課題

（１）場面設定の工夫

今回は、第６学年外国語科にある Lesson６　Olympics　and　Paralympics の単元で実践を行うことにした。２０２０年は、本来であれば、東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定だったため、世の中の話題になり、子どもたちも興味を持てる内容になるはずだと考えていたが、現在の状況から開催延期になり、話題として盛り上がらなかった結果になったのは残念だった。そこで、２０２１年にはオリンピック・パラリンピックが開催されると信じて、子どもたちがやり取りできる場面を考えた。【Lesson6 Olympics and Paralympics の最終活動】として「テレビ局の人や町の人になりきって、インタビューをしたり答えたりできるようになる。」という場面設定を行った。児童は、テレビ局のインタビュアーと、茨木市の６年生という役割に分かれてやり取りを行った。テレビ局役の児童は、オリンピック・パラリンピックのテレビ番組を制作するために、どのスポーツを観たいかについて街頭インタビューをすることにした。そして、茨木市の６年生役の児童は、今まで習った表現を使ってインタビュアーの質問に答えることにした。また、本単元では、He や She の人称代名詞を扱っている。そこで、インタビューに答えるときには、人称代名詞も使ってやり取りできることをねらいとした。

（２）はっきりとした課題

テレビ局のインタビュアーと、茨木市の６年生という役割に分かれてやり取りを行う活動を実践してみたが、明らかな課題に気づいた。それは、児童にやり取りをしようと伝えていたが、会話の流れが決まった形にしかなっていなかったことだ。これでは、やり取りの楽しさがあるはずがないと痛感し、また、やり取りのなかには、即興性が必要なことに改めて気づいた。即興性を入れていくにはどうしたらよいかと考えて、即興性のある活動をめざすこととしたが、同時に即興性を入れたやり取りを考えていくことの難しさも感じた。

３ 取組みの様子

即興性があるやり取りになるように、改善をめざした実践例を報告する。児童がテレビ局のインタビュアー役をするときは、６年生役の児童から情報をたくさん聞き取ってほしいと伝えていた。また、情報をたくさん聞き取るために、今まで習った表現や知っている表現を使うように促した。児童が使える表現としては、“Do you like/play/etc.～?”“Why?”、リアクション表現などがあった。それらの表現をどのタイミングで使うのかを、テレビ局役の児童に任せたことによって、即興性のある場面が生まれているように感じた。さらに、６年生役の児童にも、自分でリアクション表現や答え方を考えようと工夫して取り組む姿が見られた。また、この活動では、会話を途中で途切れさせないことを心がけてやり取りしようと児童に伝えていたので、やり取りの終わりが来るまで児童が頑張る姿を見ることができた。やり取りの後に児童が書いたふりかえりでは、「情報をたくさん聞き取れてボスも喜んでくれそうだ。」（ボスとは、場面設定上のテレビ局で働いている上司のこと。児童にインタビューをするように依頼してきた人物）や「知っている表現を使ってやり取りができた。」など、本単元のめあてに向かって取り組んでいたことがわかる児童の振りかえりがたくさん見られた。

４ 成果と今後の課題

児童がやり取りの楽しさを感じるためには、やり取りのなかに即興性があることが必要だと改めて気づくことができた。今後は、やり取りをする活動を考えるときには、「活動に即興性はあるのか？」と常に考える視点を持って実践していきたい。また、やり取りの中で、児童がねらいとされている言語材料を使ったものではない返事をしたとしても、相手に自分の考えを伝えることができていれば、やり取りとして成立していると認めればよいことが理解できた。やり取りを通して、子どもたちをつなげていきたいという願いをもって実践してきたが、学年やクラスの実態によっては、やり取りをすることが難しく感じるときもあった。そのようなときには、まずは日本語でやり取りの練習をしてみることが良いとわかった。日本語を取り入れて子どもたちの緊張感や不安感を少なくし、支援を必要とする児童も一緒に活動に参加し、やり取りの楽しさを感じてほしいと願っている。やり取りのなかで困っているクラスの仲間がいるときには、班のメンバーが助けたり、ペアの人が手伝ったりなど、集団づくりの視点を大切にした指導をしていきたい。今後も、今回の取組みを活かして子どもたちがやり取りする楽しさを感じながら、つながっていけるようしたい。

6 伝えたい気持ちを育む外国語教育

酒井　万由子

1 はじめに

４年生の担任として、外国語の学習を行ってきた。クラスの中には、英語を話したいと積極的に学習に取り組む児童がたくさんいる。しかし、学習の振り返りワークシートを見てみると、「何を言っているのか意味が分からない」「なんて話したらいいかわからない」と、不安な気持ちや積極的になれない児童もいる。様々な思いをもった児童がいる中で、クラスのみんなが、「友だちに伝えたい、話したい」と思えるような授業を日々目指している。すべての児童が友だちに話したい、伝えたいと思う気持ちが少しでも大きくなってほしいと思い教材や活動を考えた。児童同士のやりとりの場面を設定した実践と、そこから見えてきた課題について報告する。

2 取り組み

（１）教材研究

４クラスの担任でチームとなり教材研究に取り組んだ。それぞれのクラスの子どもたちの実態を共有しながら、クラスのみんなが安心して学習できることを一番に考えて授業作りを行った。さらに、児童自身が話している、伝えているという実感を持つことができるような活動内容を意識した。それぞれのクラスの授業の様子を報告したり、指導内容について話し合いをしたりすることで授業改善にもつなげることができた。今回、Unit７ What do you want?の単元で実践を行った。身近な食材の言い方や欲しい物を尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむ学習内容である。英語で言うことができる食材が多くあったことから、前向きに学習に取り組む児童が多くいた。そこで最後の活動に、「オリジナルパフェを作ろう」という場面を設定した。この単元を通して、日常生活の中でも身近な食材の名前や表現を伝えることができるようになることをねらいとした。

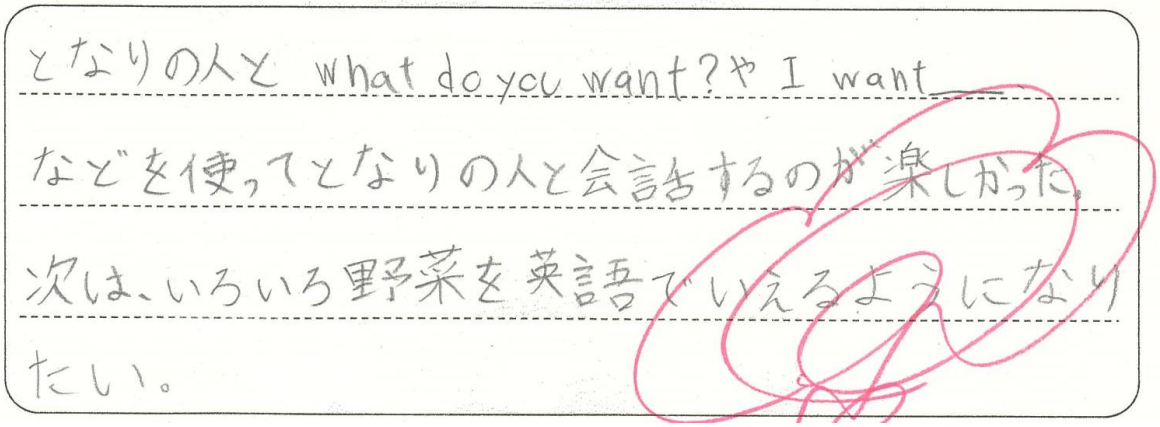
（２）スモールステップで学習を進める

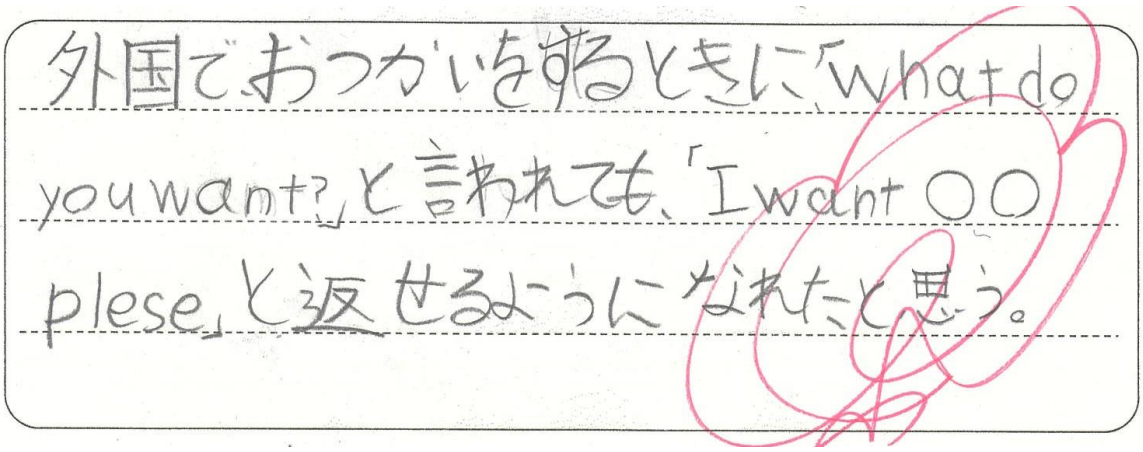
児童に、パフェに入れたい食材を尋ねたり、要求したりすることができるようになるという単元のゴールを伝え、スモールステップで学習を進めることを意識した。まず、学習する単語カードを使ってチャンツを行ったり、デジタル教科書の歌を歌ったりして単元で使用する単語に慣れ親しむ活動を行った。歌では、チャンツで練習して言えるようになった単語がたくさん入っているので、児童たちは自信を持って学習に取り組んでいる様子が見られた。また、外国語活動に苦手意識のある児童も、安心して学習に取り組めるよう、”What do you want?” ”I want ○○, please.”のやり取りを授業者と繰り返し練習できる時間設定や授業作りを実践した。

（３）取り組みの様子

パフェ作りのやりとりの活動では、お店屋さんごっこの場面設定で行った。ペアになり、お店屋さんとお客さんの役割を決め、やり取りを始めた。何度もやり取りの練習を行っていたこともあり、英語で要求したり、尋ねたりすることができている児童が多くみられた。お店屋さん役の児童は、友たちの話していることをよく聞き、欲しいものを正しく渡し、お客さん役の

児童は、自分の欲しいものを積極的に伝えることができた。英語で伝えることに対して苦手意識がある児童も、単語を使ったり、カードを指さししたり工夫して、相手に伝えようとする様子が見られた。学習のふりかえりの中には、「英語でほしいものを伝えた時に、友だちに伝わって良かった」や「自分の言っていることが友だちに伝わってうれしかった」という本単元のねらいに向かって取り組んだことがわかる児童の振り返りが多くみられた。


となりの人と what do you want? や I want ___
などを使ってとなりの人と会話するのが楽しかった。
次は、いろいろ野菜を英語でいえるようになり
たい。


外国でおつかいをするときに「what do
you want?」と言われても、「I want ○○
plese」と返せるようになれたと思う。

（4）成果と課題

児童が自ら伝えたいという気持ちを持つためには、やってみたいと思うような活動を設定することと、活動に必然性を持たせることが必要であることを実感した。また、今回の単元では、児童同士でやり取りをする活動であったため、スモールステップで学習を進めながら、やり取りを経験したことで、言葉で通じ合うことの楽しさを味わうことができた活動であったといえる。今後も、外国語学習に対して苦手意識や、学習に対して積極的になることができない児童に対して、どのように「話してみたい」「伝えてみたい」という気持ちを持たせることができるのか、ということを常に考えながら、必然性のある活動を考えていかなければならないと実感した。

5 おわりに

外国語活動の授業をしていて、日々、児童自身が伝えたいと思うような活動を考えることの大切さや難しさを実感しているが、すべての児童が伝えたい、話したいという気持ちを育むことができるよう、児童の実態を見ながらこれからも研究していきたい。